

旅への憧れ、愛しの風景 マルケ、魁夷、広重の見た世界

ホテルオークラ東京 アスコットホール 2016.07.27～08.18



ホテルオークラの第22回「秘蔵の名品アートコレクション」は、「旅」を主題としている。

人々は、古くから信仰、観光、商いのために「旅」をし、その地で様々な景観を目にし、画家たちは自らの目に焼き付いたモチーフを描き出した。

アルベール・マルケ：《アルジェの港、ル・シャンボリオン》 1944年頃 (写真上)

画伯にとっては、港は幼少時から眺めて飽くことのない風景で最も愛した画題の一つである。

「マルケ」の作風は、海、川、港などの情景を繰り返し描いた写実描写で、独特の詩情（ポエジー）に満ちているのが特徴で名作品が多い。

東山魁夷：《スミオ》 1963年 (写真下)

「スミオ」とはフィンランド語で「湖の国」の意で、画面には針葉樹林に囲まれた数多くの湖が点在し、湖と樹林を交互に配することから画伯の好みであるクラシック音楽の律動が生み出された作品である。

<展覧会構成・見どころ>

第1章 <日本の風景をめぐる>

「旅」を通じて目にする様々な風景を「横山大観」らの日本画家の作品で巡るもので、数多くの人に愛されている「富士山」の名作品が展示されている。

第2章 <愛しの風景>

「佐伯祐三」らの西洋風景に出会った日本人画家の作品、静かで卓越した描写で注目の「アルベール・マルケ」、風景画家「東山魁夷」の作品の特集である。

第3章 <広重、旅への憧れ>



「歌川広重」《東海道五十三次》（浮世絵全55点）は印象的な景観と人々の生き生きとした姿が描かれ、現代にも通じる「旅の粹と憧れ」が紹介されている。